



TITLE:

ハツダ最近の發掘に関する問題

AUTHOR(S):

桑山, 正進

CITATION:

桑山, 正進. ハツダ最近の發掘に関する問題. 東方學報 1973, 45: 335-357

ISSUE DATE:

1973-09-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/66499>

RIGHT:

ハッダ最近の發掘に關する問題⁽¹⁾

桑 山 正 進

タパ・シヨトル廢寺跡—塔院—壁龕・祠堂—阿波邏羅龍王教化—
佛塔分類—主塔構成—剎型構成—基壇形態—佛塔編年

タパ・シヨトル廢寺跡

『大唐西域記』卷第二那揭羅曷國の醯羅城を中心にした現在いうところのハッダは、東にガンダーラ、西にカーピシーをひかえ、兩地方の中間に當り、佛教寺院跡の豊富なことは兩地方におとらない。その様相に關してはジュール・バルトウー Jules Barthoux の調査に依るところが大きい (J. Barthoux, *Les Fouilles de Hadda. I stupas et sites. Memoires de la Delegation archeologique française en Afghanistan (MDAFA)*, Tome IV, Paris, 1933 ; III *figures et figurines*, MDAFA, Tome VI, Paris, 1930)。ところがこの報告は發掘成果の正確な傳達というより、むしろ調査資料にもとづく研究が主であり、われわれがハッダの佛教寺院を再検討しようとする場合に利用價值が低くなっている。したがって再検討は實地の調査に移らざるを得ないのであるが、バルトウーによって發掘された遺跡はその後破壊され盡して、このような實地の再検討にも支障をきたしている。故ローランド Benjamin Rowland Jr. の言をまつまでもなく、狂信的なムスリムにその原因がある (*Ancient Art of Afghanistan*, Tokyo, 1964, p. 222)。また遺跡ばかりでなく、遺物はカーブル博物館とギメ博物館に分割所藏されて不便である。しかも報告された遺物には彫像が多く、大量に出土したはずの建築細部などはすくない。彫像の検討には裨益するところがあった

が、ハッダの寺院全般に關する再検討は、このような限られた残され方からはむずかしい。

一九六六年一〇月に開始されたタパ・ショトル Tapa Shotor の發掘は、今世紀二〇年代に行われた調査の不備やその後の再検討のむづかしさを補うばかりでなく、またあたらしい事實をハッダにもたらした。その意味で重要であるのにあまり注意されていない。この調査はアフガニスタン人だけによる組織的なものであり、發掘後の保存がゆきとどいた遺跡で發掘者以外が再検討を實際におこなえる利點がある。發掘は冬ごとにおこなわれ、現在に至り、一九六八年までには塔院 stūpa court が、また一九六九年から一九七二年春までには塔院以外の地域の發掘がすすめられた。ここではほぼ完全に發掘がおわった塔院に限って若干の紹介をおこない、筆者の觀察結果も加えてハッダ寺院調査の今後の問題點を指摘したい。

一九二二年以來三〇年間のアフガニスタンにおける考古學調査權が、フランスと同國との協定により、フランス人に獨占的に委ねられたことは周知の事實である。その權益のきれた一九五三年よりのち、イタリア (Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente) や日本 (京都大學) をはじめとするフランス以外の外國人調査が可能になった。しかしアフガニスタン人だけで組織された調査はおこなわれることがなかった。從來文部省に屬していたカーブル博物館は、外國調査隊と提携して、joint expedition の形で調査に参加していた。ところが一九六五年冬前後になってハッダにおける盜掘がすさまじいものとなり、G・トゥッチ博士をしてハッダ全域保護の要請をなさしめ、それと同時に故水野清一博士は、ハッダ西南部にあるラルマ寺院跡の發掘をあえておこない、發掘後の管理を同國政府にまかせることにより、ハッダ全域の保護を促そうとした。一九六六年に始められたタパ・ショトルの發掘は、アフガニスタン政府の如上の事件に對するリアクションに他ならない。

發掘擔當は、あらたに設置されたアフガン考古研究所すなわち Direction générale d'archéologie et de la conservation des

monuments historiques (局長は Dr. Chaibai Moustamindy) である。カーブル博物館とともに情報文化省に属する。同国における文化財の管理運営をこの二部局が分擔して行うこととなり、文化財行政が一步すすめられたのである。すなわち博物館は出土品の管理展覽とそれによる教育に任務が限定され、従来の考古活動の監督や外國調査隊に關する一切の事務・責任は新局の取り扱うところとなった。同局は外國隊に對する役割を積極的に果すとともに、アフガニスタン人だけの調査團を組織し、ハッダ村北方の獨立丘陵タパ・ショトルの發掘を開始した。發掘されたこの遺跡には兵士が常駐し、これ以外のハッダの諸遺跡をも巡察兵二名が監視をおこない、いまハッダは以前のような盜掘をうけないこととなった(藤田國雄「ハッダの遺跡」、藝術新潮一九七號、一九六六年五月)。

塔院 (圖1・挿圖1)

東側に狭い入口をもつタパ・ショトルの塔院は、不整形の四邊形平面をもつ。その中心に東南むきの主塔をおき、周圍に小塔を配する。兩者の間には主塔に沿って繞道ができるよう空間が残され、主塔と小塔群全體をもまたまわれるよう、祠堂を開いた塔院外壁との間にも空間が残されている。祠堂は八つあるが、二祠堂は未發掘である。塔院に至る參道はなく、入口は廣場にひらいている。この廣場の北壁は僧房區の外壁の外側ということになり、そこに三つの壁龕をひらいている。

塔院全體の建築には、構築材料の使いわけがみられる。すべての塔は石材に、その他の架構は泥による。主塔の壁面は石膏塗装で、そこにストウツコ彫像を飾るが、内核や壁面の構築は、片岩、石灰岩、礫岩、河原石を用いる。各々の塔によりこのような石材の利用法や組み合わせは異なり、後述のようにそれによって構築時期に差がみられることもある。ところがこれに對して祠堂や祠堂がひらかれている塔院外壁、あるいは僧房など、塔以外の建築はすべて正方形の泥練瓦や

泥、練り土(いわゆる *pisé*)によりつくられている。そのうえ、祠堂に配置された彫像も泥づくりであり、塔莊嚴としての彫像がストウッコ製であるのといちじるしい対照を示している(圖11)。

タキシラ *Taxila*、ガンダーラ *Gandhāra*、スワート *Swāt* における佛教寺院では、塔もそのほかの建築も石造である。ハッダ東方のバサーワル *Basāwal* 石窟寺院にある祠堂(泥、ストウッコ兩様の彫像が出土した)も石積である(水野清一編『バサーワルとジェラバード・カーブル』京都大學、一九七〇、第一部第二章參照)。ジェララーバードより西方では、カーブル北方のシヨトラク *Shotorak*、ハム・ザルガル *Kham Zargar* のコー・イ・モリ *Koh-i-Mori*、カーブル南方ローガル *Logar* のグル・ダラ *Gul Darah* が塔も祠堂も僧房も石造建築である。これらとほぼ同地域にあるカーブルのテペ・マランジャン *Tepe Maranjan*、ゴルバンド溪谷中のフォンドキスタン *Fondokistan*、ガスニーのタパ・サルダール *Tapa Sardar* などがタパ・シヨトルと同じく、塔が石積、そのほかの建物が泥づくりである。

このような構築のしかたをみて、寺院の中心的存在である佛塔、とくに塔院の主塔の建築にあくまでも石積が固執されている事實に注意する必要がある。バクトリア以北の塔院の主塔が泥づくりである以上、如上の地域の高大な佛塔建築が耐久性などの理由で石積にする必要があったとは考えられない。祠堂や僧房、あるいはタパ・サルダール小塔にみられる泥建築技術が、壯大な塔建築を許さなかったとも考えがたい。そうすると、ヒンドゥー・クシュ山脈以南の各地の塔院において石積佛塔と相並び、泥づくり祠堂がある場合、主塔だけは石を積んで建立するという傳統を考える必要があるのではないか。タキシラからヒンドゥー・クシュ山南にわたる地域において、フォンドキスタンもタパ・サルダールもテペ・マランジャンもタパ・シヨトルも佛院建築史上の後半期に屬するからである。

壁 龕・祠堂 (圖2、3、6、7・挿圖1)

塔院入口のむかつて北側の壁、すなわち正確には北東から南西にのびて塔院につづいている一八・六メートルの壁面は比較的残りがよい。この壁に三つの壁龕(挿圖1、A、B、C)がつくられている。北東隅に近い位置、階段昇り口、それに兩者の中央の三龕である。そのうち残り方のよいのは、中央の龕Bと階段ぎわの龕Cとである。後者は、中央に坐佛(頭部が脱落)、左右に各二體の供養者泥像を配する。その配置法は、後方の像を前方の像の上方におくやり方である。後方供養者には頭部が缺損し、むかつて右側の像ではとくに残りがわるい。これら供養者の性格はしたがってつかみにくい。供養者のうち前方左右の像は僧形である(圖2、3)。大づかみなモデリングながら表情の彫出は卓抜である。中央龕では蛇座が注目される(圖7)。二匹の蛇がほぼ左右對稱にからみあつて高い臺座の基部をまいてゐる。後尾をからみあわせ、結び目のようにし、これを中心にして頭は臺座の左右兩端におき、むかいあつてゐる。関連資料はバーク・ガイ Bagh Gai にある(J. Barthoux, *Fouilles de Hadda, MDAFA IV, p. 165*)。

塔院にはいると、階段の右側に北へ約一四・八メートルに及ぶ塔院北東外壁がある。そこに二つの祠堂D、Eをひらく。祠堂に至る間に三つの低い腰掛狀の臺が壁にとりつけられている。臺と臺との間隔はほぼ三メートルである。これとまったく同性格の臺は、東南外壁にも三つある。これら六つの臺はいずれも粗質の石膏を塗り、表面はまったくあらされても、あれでもおらず、塗裝當初の狀態を保っている。また佛像をすえたあともない。このような臺を塔院の外壁にそつて据えた例はバルトゥーの發掘した若干のもの以外にない。その性格が何であつたか今後の發掘例の増加をまつしかない。

祠堂のうち、Eは祠堂ということがわかるだけでとくに注意を促すことはない。ところが祠堂Dはいろいろな特色をもっている。間口は約一・八メートル、奥行は一・六メートル、奥壁の幅は一・九メートルで間口よりやや廣めである。祠堂の床は、塔院繞道部の床面より高くつくつてゐる。祠堂の床には三壁にそつて、幅四〇センチの低い基臺をベンチ狀に

まわしている。

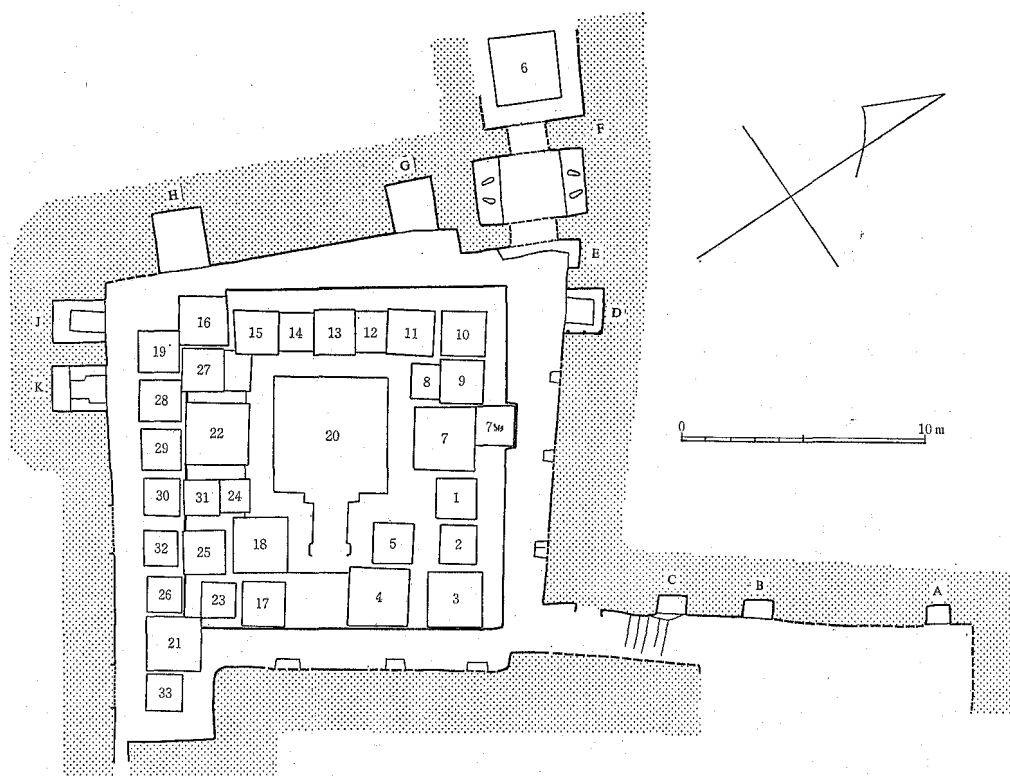
各壁は、鴨居のような張り出しをつくり出して、上下二面に區分されている。上段は狭く、張り出しの上に角柱をならべていた。いまはむかつて右隅に一本残るだけである。おそらくコリントゥス風の柱頭を載せていたもので、柱身には、平行した二本の刻線があり、刻線の上下兩端には内彎した刻線で二本の刻線を結んだ裝飾がみられる。柱礎部は粗い二層の刳型である。下段は十分に高く、三本の圓柱を彫出し、圓柱は尖拱アーチ *pointed arch* を支えている。アーチ内には、蓮華座に立ち、圓光をつけた佛像がある。泥像であるからあらかたくずれ去り、わずかに兩足や頭光を残しているにすぎない。この祠堂の壁面構成、すなわち鴨居狀の張り出しで壁を區切り、上下に柱をつける構成はアフガニスタンの多くの石窟寺院にみられる石窟内部の壁面構成とまったく同じであり、よく知られているバーミヤーンとの關係が追求されねばならない。

圓柱の柱身は單なる細長い圓筒ではなく、溝彫裝飾 *fluting* をもち、しかも溝の上端が三枚の花瓣のようにめくれあがって便化しているのである。また柱礎部は、刳型の便化表現であり、截頂四角錐に水平刻線を入れ、刳型を摸している。溝彫裝飾の例はこの地方ではまれで、しかも便化している點が注目される。スワートのブトカラ塔院の小塔 14、27 にみる綠泥片岩の細い圓柱は、溝彫裝飾をもつが、數本の線刻に終っている (D. Faccena and G. Guilini, *Reports on the Campaigns 1956-1958 in Swat (Pakistan)*, *Reports and Memoirs* Vol. I, ISMEO, 1962, Pls. XIII, XIV.)。もっとも整った例は、わずか一五・六センチの小さいテラコッタであるが、タキシラのシルカプ Sirkap E 地區第 III 層出土品であるから、年代もふるく、キリスト紀元のごく初期である (Sir J. Marshall, *Taxila*, Vol. III, 1951, Pl. 135, No. 126)。

圓柱とアーチと鴨居との間に充填された猛禽の浮彫に注意する必要がある。上段アーチの間に翼をなかばひらいて立ちあがった猛禽は羽毛の表現がたくみである (図 6)。猛禽の表現はわりに多いが、アーチ間充填の役割を果す例は多くはな

い。ピラミーン第二塔（番號は C. Maasson による）の無蓋の舍利容器に打ち出しの例がある（H. H. Wilson, *Aviana Antiqua*, 1841, Pl. IV, 1, 2）。これに近いものとして、ダルマラージカー出土品（Sir J. Marshall, *op. cit.*, Vol. III, Pl. 217, No. 78, Vol. II, p. 710.）シクリ出土の浮彫佛傳中のもの（L. Lyons and H. Ingholt, *Gandharan Art of Pakistan*, 1957, No. 145.）がある。しかしこれらの例では翼はいっぱいに開かれ、アーチ間の三角スペースをみたすにすぎない。三角スペースをみたすものというだけならば、出土地不明でいまホール博物館にあるガランド上に立つ鳥の例があり、またアーチと鳥との組みあわせは無数である。しかし、タパ・ショトルの鳥は上のどれとも形態や表現がちがひ、ヒンドゥー・クシュ以南では近い例がない。發掘擔當者ムスタマンディ氏はカーブル南方のグル・ダラ塔院出土の例が年代的に近いと考えたが、私はこれをみたことがない。そこで次善の資料に、スルフ・コタル *Surkh Kotai* 神殿 B の拜火壇正面を飾る二羽の鷲を考えてみる。ここでは、アーチ間充填という添えものではなく、拜火壇の主たる莊嚴である（D. Schlumberger, *Le temple de Surkh Kotai en Bactriane* (II) *Journal Asiatique*, CCXLII, 2, p. 192, Pl. IV, 1.）。

三本の壁柱で區切られた柱間二間に各一羽の鳥が立ちあがって翼をなかばひらいている。壁柱は柱頭部から礎盤にいたるまで完全に残ったコリントゥス風で、中央の柱は圓柱、兩側は角柱である。ちょうど柱頭の高さに鳥の胸があり、それより上はくずれている。ところが中央圓柱の柱頭の上には小さい礎盤が残り、これら三本の柱の上に別の架構のあったことがわかる。その上部架構が三本の柱とアーチであったことは、同時代の佛塔や浮彫から推しはかることができる。このアーチの下に鳥が彫り出されていたことになる。アーチ間の充填として鳥が配されていたのではないけれども、スルフ・コタルのこの例が、鳥の形態や羽毛の表現、あるいはアーチと圓柱とのセットなどの點でタパ・ショトルのものにはないに近いとみたい。そのうえ兩者とも素材が同じで、泥づくりなのであれば、技法上からの關連も考えられないことではない。



挿圖1 タパ・ショートル塔院平面圖（1968年當時）

塔院北隅を形成するのは、祠堂Fである。前室と主室とから成る。主室の残りは悪いがおそらく正方形の平面であった。中央に一邊二・八メートルの方形基壇をもつ小塔が安置されていた。いまは初成基壇を残すだけであるが、柱間四間のこの基壇の北壁むかって左端の柱間には繪畫が残っていた。壁の左端をむく代赭色の線描による人物の顔で、柱間いっぱい描かれている。

前室の平面形は、長邊四・六メートル、短邊二・六メートルで、主室をつなぐ正中線の方向に短邊がある。左右側壁には、床に奥行九〇センチ、高さ約二〇センチの低平な基臺をもうけ、そこに大佛立像をおいた。右壁では基臺の中央に長さ七七センチという大きい足が残っている。主尊のむかって右に供養者立像があり、その履物はサンダルではなく、皮の長靴で、スルフ・コタル、シヨトラク、マトウラーのクシャーナ風俗の人物像のものと同じである。この供養者が據るのと同じ壁面前方には、小さく低いコリントゥス風壁柱が尖拱アーチをのせ、アーチの下に蓮華座上の坐佛をおいたが、いまは臺座が残

っているだけである。塔院西南の外壁（入口と塔をはさんで反対側の壁）の西端に二つの祠堂J、Kがある。また未発掘の祠堂がその南に二つある。発掘された祠堂はほとんど規模が同じで、間口二メートル、奥行二・二メートルを測る。左右側壁は天井にむかって内彎しているから、カマボコ型天井 *barrel vault* を形成していたと考えられる。泥煉瓦づみのこの種の天井は例がすくない。奥壁の高さは三メートルまで残っている。カマボコ型天井はガンダーラ地方にも例があるが、一般的ではない。ジャマル・ガリ *Jamal garhi* やタフティ・バイ *Takht-i-Bahi* の半地下式僧房の天井はカマボコ型である。しかし、各石材はカマボコ型を形成するようにあらかじめ加工され、それらを組み合わせたもので、建築技術からは本来の *barrel vault* とはいえない。佛教寺院の例を求めるならば、ペシャワール盆地にはなく、ハッダ・ジェラーラーバード以西にある。フォンドキスタン、タパ・サルダール、タパ・スカンダル *Tapa Skandar*、ジェラーラーバード西方山麓の石窟などに本来のこの種のアーチをみる。石積や泥煉瓦積以外では、カマボコ型天井は多くの石窟寺院において岩盤をえぐり出したものとしては無数に存在するが、それもジェラーラーバード以西に限られる。

祠堂Jは、奥壁に少くとも三體の泥像があった。壁面中央に三ヶ所圓形剝離跡があり、柄孔であることを示し、佛像をとめていた證據である。彫像は下半身だけがかろうじて残る。むかつて左の側壁奥には、奥壁左端の泥像と接して脚だけが残っている。

祠堂Kには、奥壁に獸脚が支える臺座があり、ここに施無畏印を結んだことがわかる像があった。その像の前には、ほとんど残らないが、結跏趺坐の小佛がある。兩側には立像があった。脚以下が残り、サンダル狀の履物によって菩薩像であったことが考えられる。いずれも低平な基臺にのっていることは、他の祠堂とかわらない。側壁にはもとは各々二體ずつ佛像があったことが、菩薩像の前に小さい足が残っていることで知られる。祠堂の床面はいちめんに焼けて黒くなっているが、火は像に及んでいない。

塔院北西の外壁には祠堂Fのとなりには祠堂Gがある。規模はKやJと同じである。奥壁に坐佛大小を前後しておき、側壁に立像をおく點、祠堂Kと著るしくにている。ただこの祠堂奥壁の大坐佛は欽落部分の状態から倚坐像であつたことが知られる。

阿波邏羅龍王教化(圖8、9、10)

塔院北西外壁の西端にある祠堂は規模大きく、表現されたテーマも特殊であると同時に、その泥像群がまる彫で、しかも頭部をよく残すものもあり、造像史上タバ・シヨトルの位置を特異なものにしている(挿圖1、H)。

二・四メートルに二・九メートルの平面で、側壁殘高約二メートル。火災により梁材が祠堂内部に焼けおち、その群像も焼け、像の木心が熱をうけてもろくなり、のちの雨水浸透による被害も大きかった。すべての像は相接して複雑に配置され、しかも各像は繊細なタッチをみせていたから、ここの清掃には最大級の注意が拂われ、三五日もの長期の作業でようやく概略をつかむにいたつたと言う。

この祠堂にはもとは一四體の泥像が物語の一場面を表現したものとしておかれたが、清掃されたあと原位置に残っていたのは八體である。ムスタマンディ氏がこの祠堂を名づけて Fish Porch としたとおり、床や壁面全體は、水があるいは流れ、あるいは渦をまくありさまを泥の浮彫りであらわし、ことに奥壁には、蓮の葉が風にひるがえるものを表現し、奥壁から床にかけて魚類の遊泳するさまを高浮彫でみせ、この全體が蓮池ないし泉流における場面であることを物語っている。その魚類のなかで二つの頭を重層的にもつ怪魚が非常に珍奇な彫刻として特筆されるのである(圖8)。

奥壁の中央には、三葉形に波の表現されていない部分がある。この部分の縁邊には數個の柄孔があき、彫像が剝落した跡であることを示している。この三葉形はもちろん頭光と身光であり、その形態から坐像としての佛陀像がとりつけられ、

この場面における主演者の一人であったことを示すのである。この場面を演ずる諸像は、奥壁兩端に上下二體づつとむかつて右側壁に坐像、左側壁に立像二體（うち手前は兩足のむき、さらに正中線よりやや左に偏して一體がある。左右兩隅の像は頭部はすでに欽落しているが、偏袒右肩、身體に密着した衣をつけ、腰から上を水面にあらわす。壁の隅角を巧みに利用しておかれている。兩像ともほとんど同じ像を對稱にとりつけていたらしい。左隅の床にひざまづいて合掌する菩薩像と頸飾や著衣がにており、頭部がなくても、同じく菩薩像と考えられる。合掌菩薩は完全に頭部を残している（圖10）。顔のつくりには、いわゆるハッダのストウツコ像のような彫りの鋭さはなく、全體にまるみがあり、眼も口元もみなまるい。とくに眼のつくりが、壁龕Cの僧形像に近い。衣紋のまるみ、褶の重い表現が、壁龕Bの像に通ずる。むかつて右の隅にもひざまづく像がある。おそらく左のこの像と左右對稱におかれたものと考ええる。左側壁にそって立つ人物は腰から上がなくなっているが、左腕はやや残っている。不思議にも残された下半身は壁の方にむいている。左手をさしあげた姿勢で、膝までもない短衣を着、しかも腰でたくしあげ、動的な姿勢である。ムスタマンディ氏とともに私もこの像を執金剛神 Vajrapani に比定するのは、その姿勢、舉手、短衣による。執金剛神の手前の壁を背にしてもうひとつ立像があったらしく、正中線にむかつて八の字にひらいた足がのこる。また合掌菩薩の右うしろの壁ぞいにも足が一對残っている。

次に當祠堂の場面を解釋するのもっとも重要な人物像がある。ちょうど執金剛神の前に、祠堂中央をむいて、いままさに膝を屈しようとした像である（圖9）。頭部はなくなっているが、豊麗な頸飾をつけたこのトルソーは完全にまる彫りで厚みがあり、量感がある。水にぬれて密着した衣をつけた體は蓮池の中から出現したようである。兩脚の間の床面からくねくねと像の背後にのぼってゆく蛇があることに注目すれば、この像自身を龍王に比定することはさほどむづかしい。い。

すべて木心泥像群で構成されるこの祠堂が表現する主題は、佛陀、執金剛神、聖衆、龍王、蓮池（あるいは泉流）によって

判定されるであろう。しかも龍王の位置は、諸々の聖衆から離れ、ひとり獨立しておかれる關係にある。

いわゆるガンダーラの浮彫にあらわれてくる龍王に、ナーガ・カーリカ *Naga Kalika* がある。すなわち佛傳中の一場面である。釋迦は菩提樹下に急ぐ折しも、カーリカ龍王の住處を通った。カーリカ龍王は釋迦のからだに光りかがやくのをみて、成道の近いことを知り、讚歎合掌したのである。しかしそこにはこの祠堂があらわすものをみたす要素がない。

次に、『大唐西域記』（京都帝國大學文科大學叢書本）卷第二那揭羅曷國の條に、

……城西南二十餘里。至小石嶺。有伽藍。……伽藍西南。深澗陷絕。瀑布飛流。懸崖壁立。東岸石壁。有大洞穴。瞿波羅龍之所居也。……昔如來在世之時。此龍爲牧牛之士。供王乳酪。進奉失宜。既獲譴責。心懷恚恨。卽以金錢買華。供養受記窣堵波。願爲惡龍。破國害王。卽趣石壁。投身而死。遂居此窟。爲大龍王。便欲出穴成本惡願。適起此心。如來已鑒。愍此國人爲龍所害。運神通力。自中印度至。龍見如來。毒心遂止。受不煞戒。願護正法。……

という瞿波羅龍の教化説話がみえる。

また、同じく卷第三烏仗那國の條には、

……耆揭釐城東北。行二百五六十里。入大山。至阿波邏羅龍泉。……此龍者迦葉波佛時。生在人趣。名曰殑祇。深閑咒術。禁禦惡龍。不令暴雨。國人賴之。以穡餘糧。居人衆庶。感恩懷德。家稅斗穀。以饋遺焉。既積歲時。或有逋課。殑祇含怒。願爲惡龍。暴行風雨。損傷苗稼。命終之後。爲此池龍。泉流白水。損傷地利。釋迦如來大悲御世。愍此國人獨遭斯難。降神至此。欲化暴龍。執金剛神杵擊山崖。龍王震懼。乃出歸依。聞佛說法。心淨信悟。如來遂制。勿損農稼。龍曰。凡有所食。賴收入田。今蒙聖教。恐難濟給。願十二歲一收糧儲。如來含覆。愍而許焉。故今十二年一遭白水之災。

という阿波邏羅龍教化の説話がみえる。

もしいま掲げた三者のうちから、この場面により近いものをとれば、『大唐西域記』の二つの説話であろう。ムスタマンディ氏は、瞿波羅龍王教化を忠實にうつし出したものではないと認めつつも、地方的なこの説話を比定の対象にしないわけにはゆかないと考えている。『大唐西域記』にみえるこの那揭羅曷國における説話に執金剛神は出てこない。しかし、この瞿波羅龍に關連する那揭羅曷國の佛影窟の由來をのべた『佛說觀佛三昧海經』卷七には、國の飢饉疾疫の原因である惡龍・羅刹を教化する時、執金剛神の金剛杵で龍身を焼きこらしめるとみえる。また阿波邏羅龍王教化の場合では、執金剛神の杵は山崖をうち、重要な役割を果している。『大唐西域記』の瞿波羅龍説話では、龍の住處はけわしい崖、瀧、洞穴という環境で、ゆったりした蓮池や泉には關係が浅い。それに對し、阿波邏羅龍説話にはスワート河の源である泉が舞臺で、タパ・ショトルの祠堂に表現されたものに近い。ところがこの説話はスワート地方のものであり、地理的に遠く、すぐに比定して、タパ・ショトルのこの祠堂の場面が阿波邏羅龍教化を表現したものといいきるわけにはゆかない。しかし、『大唐西域記』などに燃燈佛の佛跡が多いと記された那揭羅曷國において、燃燈佛關係の遺物が實際に出土した例はまずなく、ガンダーラやカーピシーに出土例が多い。この現象を重視するならば、タパ・ショトルのこの場面もそういう現象のひとつと考えて、阿波邏羅龍説話に比定してもよいはずである。ある地域で人口に膾炙された説話をその地域で可視的なものにかえて、塔供養に參詣するひとたちに見せ、説法の一助とする必要があるか。しかも瞿波羅龍のために釋迦如來がその影をとどめたという有名な佛影窟は記録によるかぎりタパ・ショトルからさほど遠くない。

佛塔分類 (挿圖1)

主塔は東南にむき、その周圍に小塔三一基を配する。すべて方形基壇をもつが、初成基壇はよく残る一方、第二基壇以上は倒壊している。初成基壇の形態にもいろいろあり、丈が高いものはすぐ圓筒部をのせていたようである。ムスタマン

デイ氏は、小塔群を配置、構造、細部によつて二群に分類し、この二群が造建時期の前後をあらわしていると考えた。第一群すなわち前期の造立に屬するのは、1、2、3、5、9、10、11、13、15、16、18、21、22、25、26、27、31、32に當る一八基で、主塔にもっとも近接した位置にこれを方形に東南から北まわりに西側へと取り圍んでいる。分類基準は、(1)刳型が大部分片岩小口積で、その上をストウッコでおおう。(2)内部は泥をつなぎにつかつた石積である。(3)壁柱は片岩小口積で、アカンサスの中央の葉が折りがえり、先端を下にむけ、その葉脈のうち主脈となるものの若干例には、節をつけたものがある。第二群すなわち後期の造立に屬するものは、4、7、7(乙)、8、12、14、17、19、23、24、28、29、30の一三基である。基壇刳型や壁柱は石灰岩をきつて細部の用途にそつた形に整えたもので、その上にストウッコを塗り、片岩小口積ではない。壁柱柱頭のアカンサスの葉は重列で、上列は兩端の渦卷の間にあり、冠板の上へと立ちあがり、先端は折りがえらない。柱身中央に二本の平行刻線とその線端をつなぐ内彎刻線とで形成される裝飾をもつ。發掘擔當者ムスタマンデイ氏がこの二群に前後關係を認める理由は壁柱裝飾にある。第一群では主脈に節のあるアカンサスの葉、第二群では柱身にある刻線裝飾の形態がそれである。第一の、主脈に節のあるアカンサスの葉は、アイ・ハヌムにおいて出土したものの系統と考え、第二の刻線裝飾は、スルフ・コタルにみる同形態の裝飾の系統に屬すると考えた。アイ・ハヌムとスルフ・コタルとが同じくバクトリアの地にありながら前者がグレコ・バクトリア期に屬し、後者がクシャーナ期に屬する以上、タパ・シヨトルにおいてもこの二者間に時期差があると判定したのである。しかしアイ・ハヌムにこの種のアカンサスがたしかにあり、アイ・ハヌムの下限が前二世紀中葉であつても、またスルフ・コタルにこの裝飾があり、スルフ・コタル創建がカニシユカであつても、この前後關係をタパ・シヨトルの造塔時期差にそのまま使うとはまったく論外である。實際この地方の佛教寺院の年代を、ただひとつの佛教寺院の調査だけから決めることは不可能に近い。事情はタパ・シヨトルでも同じである。そこで次善の策として、ハッダで最近發掘された寺院の調査結果と比較してみ、タパ・

シヨトルの塔院がそれらと関連してどういう位置にあるかを考える。その寺院とは、前に私も加わった京都大學一九六五年度の調査になるラルマ廢寺跡にはかならない。塔院に關して兩者には比較検討すべき點が多々ある。⁽⁴⁾

主塔構成（挿圖1、3）

タパ・シヨトルの主塔は一邊四・七メートルの丈高い方形基壇をもつ。各面は五間で各柱間に一尊立像を配している。ラルマの主塔は一邊八・五メートルで同じく丈高い方形基壇をもち、各面は七間、柱間には三尊立像を配する。各柱間の立像数はちがうが、佛像の様式は酷似している（以下ラルマについては註4の文獻による）。ラルマでは三尊像も壁面も非常に微細で良質のストウッコでおおわれていたが、その東壁（むかつて右壁）のうち、正面寄りの二間と正面右側の柱間との都合三間は、壁柱部だけは良質のストウッコを残し、壁面だけきりとして、そのあとを粗い砂まじりのストウッコで補修していた。補修後の壁面には佛像を飾った形跡はなく、朱描の壁畫があつたようである。ラルマ補修壁のような粗いストウッコを塗装したのがタパ・シヨトルの主塔の壁面である。

ラルマ主塔の莊嚴は、三尊像のほかに壁に沿って坐佛を隨所に計七體置いたあとがあつたが、タパ・シヨトルでは、正面階段をはさんだ左右の柱間に三葉型の壁龕をもうけている。右龕内部には禪定佛をおき、龕外むかつて右にひざまづく供養者をはめてある。左龕には說法印の坐佛をおく。相方とも龕壁のあれ方がはなはだしい。この龕形は同じく三葉型ではあるが、細部は大いに異なっている。三葉型のうち中央の龕と側龕との高さの比が、むかつて右では大きく、左では小さい。かつ左では三葉型全體が二本の低い壁柱によって支えられているのに對し、右では壁柱がない。階段の張り出し部がつくる直交する二面の狭い壁には、坐佛と立佛とをおく。坐像は階段と平行する壁面にあつて、高い臺座に坐す禪定印の佛像であり、塔基壇正面壁と平行する壁面には、立像をおく（圖4、5）。

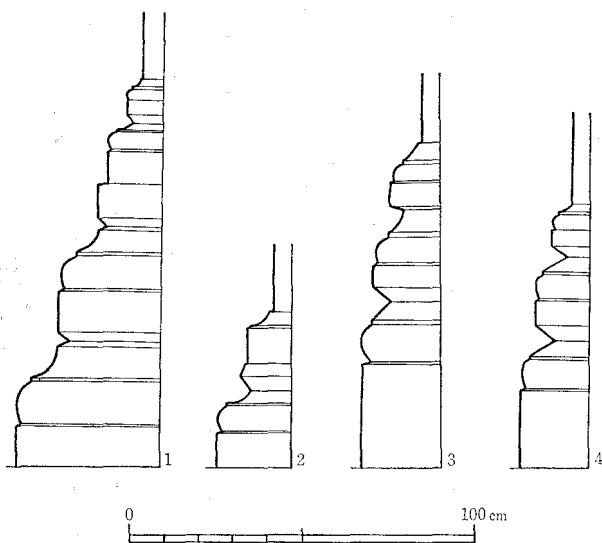
立像は塔の柱間に配されたものと同一である。この立像は階段のむかつて右側には存在しなかった。

塔基壇壁面があられているので、塔の構築法を検査することができる。内核構造は、この附近通有の礫岩を粗くうちかき、長方體に整え、これらを泥でつないで積みあげたものである。一方、壁柱、刳型、龜など建築細部は、大小の片岩をえりわけて小口積にあらかたをつくり、その上にストウッコを塗装している。石の大きさはややことなるが、この構築法はラルマと同じである。ラルマでは片岩をつむべき場所、たとえば壁柱部などは、礫岩を積んだとき場所をあけておき、のちに細部をつくり出したことが觀察された。したがって主塔の構築は下から順に内核と同時に壁面細部ができあがっていたのではない。細部は石積の最終段階で完成したのである。おそらくタパ・シヨトルでもこの構築法によったと考える。

刳型構造（挿圖2）

タパ・シヨトルの刳型はトルス torus（凹部）もスコティオス skotios（凸部）も礎盤もラルマにくらべるとややうすめで、全體に押しつぶしたような印象をうける。しかし組みあわせはほとんど同じである（挿圖2）。すなわち基壇壁面の基部刳型の上に壁柱がのっているので、壁柱柱礎部の刳型と基壇基部の刳型とが接続する。基壇基部の刳型は二組であるから、壁柱のそれを入れれば、三組がひとつづきとなっている。下段では礎盤に當る部分が非常に腰高となる特色があり、塔基壇全體がこの礎盤にのっている觀をあたえる。ここまではタパ・シヨトルもラルマも同じであるが、兩者を隔てる點は、スコティオスと壁柱の礎盤下部との處理である。タパ・シヨトルでは、スコティオスはゆるやかな曲面を示す凹部にならず、平面的に傾斜している。そしてこの傾斜面と上下對稱に礎盤下部が處理されている。ところが、ラルマでは壁柱の礎盤からスコティオスへの接續とこのスコティオスだけはタパ・シヨトル風でなく、スコティオスは本來の形を保ち、曲面をみせている。礎盤からこのスコティオスへ連結する部分も非常にうすく、タパ・シヨトルのようなきわだちがない。ラ

ルマでは下方のスコティオスと礎盤の組み合わせはタパ・シヨトルと同じである。バルトゥーの調査した佛塔の測圖を信用して使うならば、タパ・カラン Tapa Kalan 第一四一塔にみられる刳型構成がより本来の構成に近い。すなわちスコティオスの上に礎盤を重ねる場合、スコティオスが曲面をもつ本来形であれば、このような連結が自然であると考えられる。骨組を片岩で築き、その上にストウッコをぬって刳型部をつくる場合、タパ・カラン第一四一塔のような手のこんだものから次第に製作の手間をはぶくようになることが豫想される。礎盤にせよ平縁にせよ、スコティオスの上にそれをのせようとするれば、スコティオスという曲面をもつ部分をつくり出すことは、實際の柱礎を單獨でつくる場合より



挿圖 2 ハッダ佛塔刳型の種類 1. タパカランNo.141大塔 2. タパカランNo.33塔 3. ラルマ主塔 4. タパシヨトル主塔

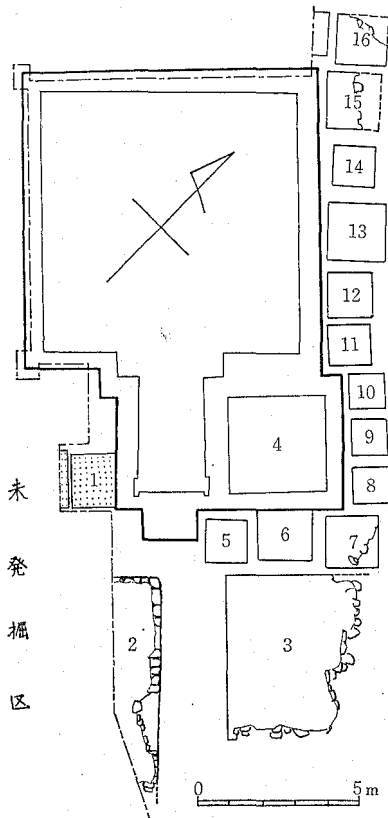
建物と固定している場合の方が造りにくい。傾斜面のスコティオスをつくった例は、タパ・カラン第四六、四八、九八塔、タパ・イ・カフィリハー Tapa-i-Kafariba 第四六塔、チャヒリ・グンディ Chakhil-i-Ghundi 第二六塔、プラテス第一、一一、一八、二九塔、ゴール・ナウ Gar Nao 第一二塔にみられる。これらとタパ・シヨトルが上の意味でタパ・カラン第一四一塔よりおくれた時期のものであるとすれば、ラルマやタパ・カラン第三三塔、タパ・カラン第一一七a塔などはその中間に位置する。

基壇形態

ラルマ主塔は高低二重の基壇をもつ、初成基壇は高さ八二センチ、上成基壇はどのくらいの高さまであったか不明である。上成基壇の壁

面が上の方からこわれているからである。現在残っている主塔の最も高いところから下成基壇の上面までは約三五〇センチを測るが、この最高點が上成基壇の上面であるとはいえない。下成基壇の周圍に二、三、五、一六の小塔がある。これらは下成基壇と同じ床面に建立されている。小塔の構造は、内部を河原石と泥土でかため、外面はすべて石灰岩をその細部の用途にしたがって切り整え、それらを組み合わせたものである。石灰岩切石装の小塔では、柱間にある三葉龜型までも一枚の石から彫り出されるという特色を示す。この上にストウッコを塗装する。

下成基壇と同一床面にある小塔群はある時期で埋め立てられた。主塔の下成基壇葛石の高さで小塔群が削平され、小塔の間やそれらと主塔との間は、こわされた小塔の石材やそれを飾っていたストウッコ像、および土などで充填され、後期床面が造成された。その床面とはもちろん下成基壇の上面とその延長面である。主塔階段のむかつて左では、小塔が二基だけ後期床面上に残っているが、基壇の基部を残すにすぎない(挿圖3、第1塔)。しかしこれらも、河原石をつんで内核とし、石灰岩切石装の外面をもつものであった。



挿圖3 ラルマ塔院平面圖

重層方形基壇の主塔すなわちラルマ前期形態の基壇をもつ主塔は、ハッダではタパ・カラン第一四一塔、バグ・ガイ Bāgā Gai 塔院主塔、タパ・イ・カフィリハー第一大塔の三例がある。一方、單層方形基壇の主塔すなわちラルマ後期形態の基壇をもつ主塔は、チャヒリ・グンディ、プラテス、ゴール・ナウ、デー・グンディ Deh Ghundi であり、現在みられる状態のタパ・シヨトル主塔

もこれに屬する。

ラルマで認めた前後二回の床面とそれに伴う塔（正確には塔の基壇形態）の變化は、タパ・ショトルでも同様であった。すなわち現状のタパ・ショトル塔院の塔群はこの遺跡における後期の様相を示したものと私は解釋する。アフガン考古研究所の調査はいまだ現床面を掘り下げてこれを確認してはいない。しかし、將來もし深掘りがおこなわれた場合、まさにそれが確認のための作業にすぎないことが、床面觀察から明らかなのに、發掘者はまったく言及していない。この床には主塔をとりかこんで主塔と規則的な關係を示す段落が認められるのである。その段落とは主塔の下成基壇葛石の端にはかならないことがラルマの事實から推測される。この低い段落は主塔正面では第四塔西隅から第一八塔東隅につき、主塔西側では第一八塔北側から第二四塔および第二二塔東北を通り、第一五塔の下へはいつている。主塔北側では相接してつくれた第一一塔から第一五塔の南端を通るので平面圖にはあらわれていない。主塔東側でまったく認められないのは、段落ができないような床づくりが行われたとしか考えられない。

この段落を下成基壇の葛石部とみとめる理由はほかにもある。それは主塔と小塔との間に残された空間である。結果的にはそれが繞道として使用されたかもしれないが、この空間がほぼ一定の幅をもっているということは床の基礎構造を考えたうえで小塔がつくられたことを示している。すなわち、ラルマにおける事實から考えられるのだが、タパ・ショトルの現状の床面の堅固の度合に差があり、それは埋め立て部と下成基壇上面との差にほかならないということである。小塔をそのような床に造立するとき、堅固に差のある場所にまたがつてつくることを避ける必要があった。そのためすべての小塔は同質の硬度の床につくられたのである。この場合、もとの下成基壇上面は造塔をゆるすだけの空間（とくに幅において）がなかった。このように考えてみると、現状のタパ・ショトル塔院にみられる主塔周圍の規則的な空間は、この主塔に現床面を上面とする下成基壇が存在することを示唆するものに他ならないのである。

佛塔編年

タパ・シヨトルに前後二期の床が豫想され、現在みられる床が後期に屬し、ラルマでもこの事情が存在したと記するのは、ハッダにおける佛塔がバルトゥーのいう編年や展開過程では律しきれないこと、およびムスタマンディ氏の言うタパ・シヨトル塔二群分類の不自然さをぬぐいきれないことなどと關連するのである (J. Barthoux, *MDAFA*, Tome IV, pp. 57—59)。

ラルマ前期床には前後三回にわたって塗り改められた厚いストウツコの床面があった。そのうちもっとも早い床面 a の上に小塔第八、九、一〇がある。主塔下成基壇むかつて右の張り出し部の上につくられた第四塔は、この張り出し部がのちの増廣であっても主塔と同時につくられたものであっても、前出の三塔がこの張り出しに規制されている以上、三塔より早い造立である。そうするとラルマ前期ではまず細部に片岩を使った小塔があり、のちに片岩をまったく使わない石灰岩切石装の小塔がつくられたことになる。さらにラルマ後期においても石灰岩切石装による小塔の造立が續いた事實がある。これにより、ムスタマンディ氏やバルトゥーの見解が妥當であるかのようにみえる。ところが事情はそのように簡明直截ではない。それはタパ・シヨトル後期の (現状の) 床には、石灰岩切石装のものも、細部だけ片岩で積んだものも、またこの兩式が併用されたものも存在するからである。タパ・シヨトル後期塔院とラルマ前期塔院とを同時期と考えれば、この問題は解決するであろう。しかし、兩塔院の主塔の構成がはなはだ共通しているうえに、刳型構成細部の異同や外装ストウツコに精粗の差があることを考えあわせると、同じ後期にしても、タパ・シヨトル後期の方がラルマ後期より時期が降るとみた方が自然である。そうなればタパ・シヨトル後期塔院の方がラルマ前期塔院より晚い時期に屬することになる。そのタパ・シヨトル後期塔院に前記のような三種の小塔構築が認められるのである。ムスタマンディ氏やバルトゥーの佛塔展開の考え方からすれば、タパ・シヨトル後期塔院ではすべての小塔が石灰岩切石装のもでなければならぬ。ここに彼らの見解の矛盾がある。佛塔全體をハッダのような限られた地域においてすら、單純に縦の關係に並べることがは

むづかしい。先にふれたように、フォンドキスタンなどのような佛教寺院建築のこの地方における終末期においても、主塔だけは片岩がその用材としてなおも用いられていることをここであらためて指摘したい（三三八頁参照）。

ムスタマンディ氏はタパ・シヨトル塔院の年代を示している。二群に彼が分類した小塔のうち、彼がより晚いと考え第二四塔に壺形土器が埋納されており、中に一塊の貨幣があった。それはメナンドロス銅貨一個（P. Gardner, *The Coins of the Greek and Scythic Kings of Bactria and India in the British Museum*, p. 49, No. 66, Pl. XII, c）とサーサーンのシャープールⅢ世（三三八～三三八）発行の摩滅した小銅貨一〇個であった。彼は後者が第二四塔の造立年代を示しているものと考えて、第二四塔をふくむより晚い小塔群を四世紀末とし、より早い一群をこれより古いものであるとした。また塔院發掘の過程で出土した多くのクシャーナ貨から考えて、塔院（私の言う後期塔院）の年代を一、二世紀においた。一方、タパ・シヨトル塔院の終末を、法顯、宋雲、玄奘の記録を参考として、エフタルによる破壊に歸した。シャープールⅢ世貨による上のような年代決定は、かのビマラーン舍利容器の年代決定にまつわる名高い錯誤を想起させる。この貨幣の埋納がシャープールⅢ世の年代をさかのぼらないことだけが確かである。エフタルによる破壊で、佛教寺院が終末をむかえたという常套句も使わない努力をしたいものである。佛教寺院に火災がみとめられる場合しばしばエフタルがその責任を負わされるけれども、火災をおこすのがすべてエフタルであるはずがない。

二〇世紀も後半になってこのような年代決定が行われるのは、ガンダーラからこの地方にかけて佛教寺院跡調査に對する基礎的な作業がほとんどなされていないからである。寺院跡の發掘では、豊富な彫像や建築遺構が出土するため、寺院に住する僧衆の生活に缺かせない土器などの精査には主眼がおかれていない。寺院の興廢は支配者に依存するほかに僧衆の存在なくしては論じることができない。僧衆の生活のない佛教も考えられない。佛教を顧慮しない佛教造像の検討が存在しないのと同じである。

佛教寺院と不即不離の關係にあるのはまた在俗信者であり、その生活の場は都市や村邑に他ならない。そしてそういう集落の遺跡は彼らの使用した土器の様相を時代をおって理解するために不可欠である。タキシラにおける都市の發掘はタキシラ第Ⅳ都市（シルスク）でほとんど行われなかったからタキシラの都市と寺院との關係はあきらかにされることがなかった。しかし、ガンダーラでは一九五八年、六三年、六四年に行われたチャールサダ Charsada の發掘が高く評價されねばならない。とくにシェイハーン・デリー Sheikhan Dheri では都市生活に要する土器と僧院生活に要する土器との間に基本的なセットとしてはあまり差異がないことがわかった。⁽⁸⁾ ジェラーラーバード一帯では集落遺跡の發掘ははじまっている。集落遺跡の廣範圍で層位的な發掘によって土器様式をくみため、土器によるこの地方の編年を行ない、寺院跡出土の土器と對比させてゆくことこそ、佛教寺院編年の基本的な態度である。そのような姿勢なしで、單に造像や建築だけをとり扱っても、砂に樓閣を築くことにならう。

註

- (1) この一文を草するに當つてアフガニスタン王國政府情報文化省考古古跡保存局から與えられた利便ははなはだ大きい。局長 C. Moustamidy 博士は、遺跡の細部に關する私の疑問に對し實地に検討する機會を便宜を與えられた。ここに明記して謝意を表す。發掘報告の要約という意味の紹介は私の意圖でもこの位でならぬので、やむを得ない發掘内容は次に掲げる概報を参照せよ。 Mariella et Shaibai Moustamidy, Nouvelles fouilles à Hadda (1966-67) par l'Institut afghan d'archéologie, *Arts Asiatiques*, Tome XIX, 1969, pp.15-36; La fouille de Hadda, par le Dr. Chaibai Moustamidy, *Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, Comptes Rendus des séances de l'année 1969 janvier-mars*, 1969, pp.119-128; Dr. Shaibai Moustamidy, The Fish Porch, *Afghanistan, Historical and Cultural*

Quarterly, Vol. XXI, No.2, pp.68-80; A Preliminary Report on the Excavation of Tapa-i Shotor in Hadda, *Afghanistan, Historical and Cultural Quarterly*, Vol. XXI, No.2, pp.58-69.; Preliminary Report of Hadda's Fifth Excavation Period, *Kushan, Culture and History*, (published by Historical and Literary Society of Afghanistan Academy and Direction générale de l'archéologie et de la conservation des monuments historiques, Kabul, 1971), pp.43-50. またイヌスタン・イ氏の報告 (*Afghanistan* Vol. XXI, No.2) では各壁龕や壁龕の全貌やその位置と壁龕の位置とを記述している。私は便向上に K と名づけて記述をまとめた。壁龕の位置と壁龕の位置とを記述している。念のためイヌスタン・イ氏の報告・壁龕の位置とを記述している。壁龕 D : Niche with worshippers' 壁龕 C : Niche with statue seated on snakes' 壁龕 B : Plastered niche' 壁龕 A : Fish Porch

or Niche with marine scenery.

- (2) ムスタマンディ氏の記述では、第九塔となっているが、附圖、記述内容からこれは第六塔のあきらかな誤りである。 *Arts Asiatiques*, Tome XIX, 1969, p.22 を参照。
- (3) 『佛説觀佛三昧海經』(大正藏經版) 卷七觀四威儀品に、……時金剛神手把大杵。化身無數杵頭火。然如旋火輪。輪輪相次。從空中下。火焰熱熾。猶如融銅。燒惡龍身。龍王驚怖。無走遁處。走入佛影。……ラルマ遺跡の報告は次のとおりである。水野清一「一九六五年イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査豫報」(『東方學報』京都第三八冊、昭和四二年) 三三〇頁～三三二頁。水野清一編『ドゥルマン・テペとラルマーアフガニスタンにおける佛教遺跡の調査一九六三～一
- (4)

九六五～』、京都大學、一九六八、五九頁～八八頁。

- (5) 割型という語は moulding, moulure, Sims に相當するものに使った。
- (6) 平縁 *fillet*, *fillet*, *schmale Leiste* のことである。
- (7) この問題についてはすでに H・バイチャエがギルニヤンやフーンを引いて論じた。H. Deydier, Contribution a l'étude de l'art du Gandhara, Paris, 1950, pp.159-160.
- (8) R. E. M. Wheeler, *Charsada*, Oxford, 1962; A. H. Dani, Shaikhani Dheri Excavation (1963 and 1964 Seasons), *Ancient Pakistan*, Vol. II, pp.17-214.

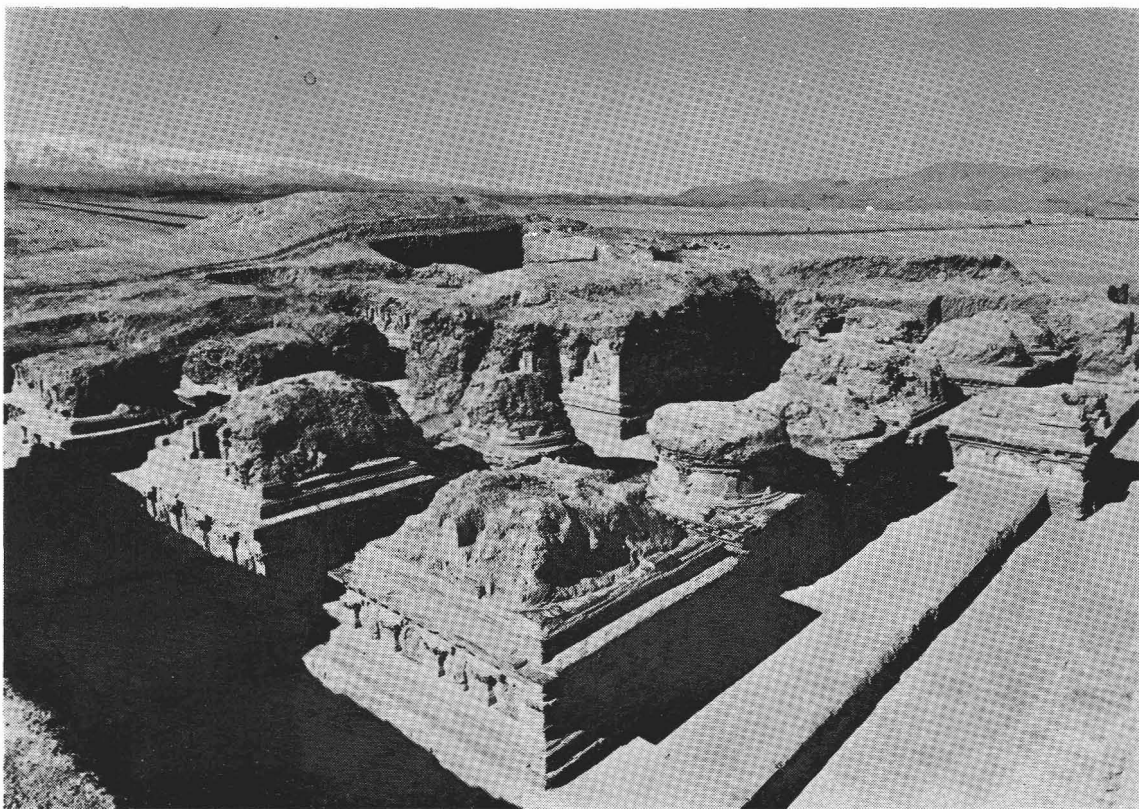


圖1 タパ・ショトル塔院

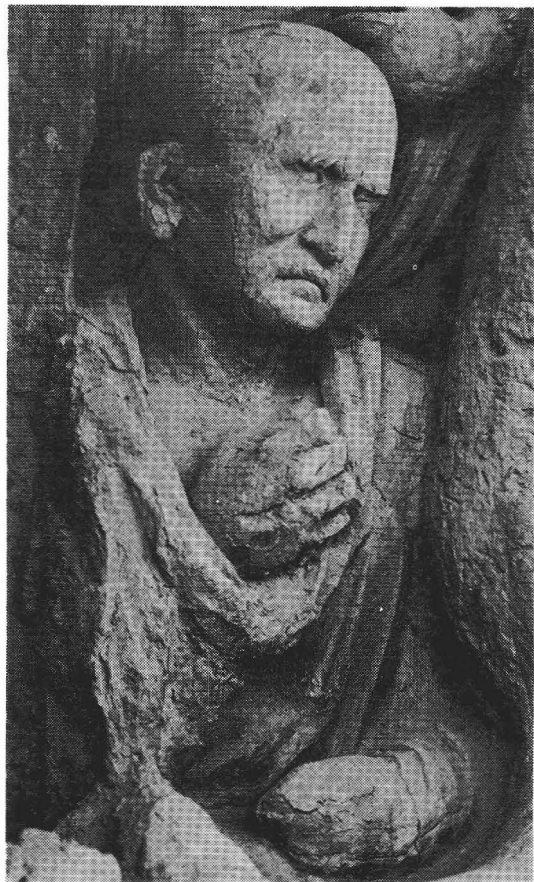


圖2 壁龕の僧形像



圖3 壁龕の僧形像



圖4 主塔正面左の龕



圖5 主塔正面右の龕

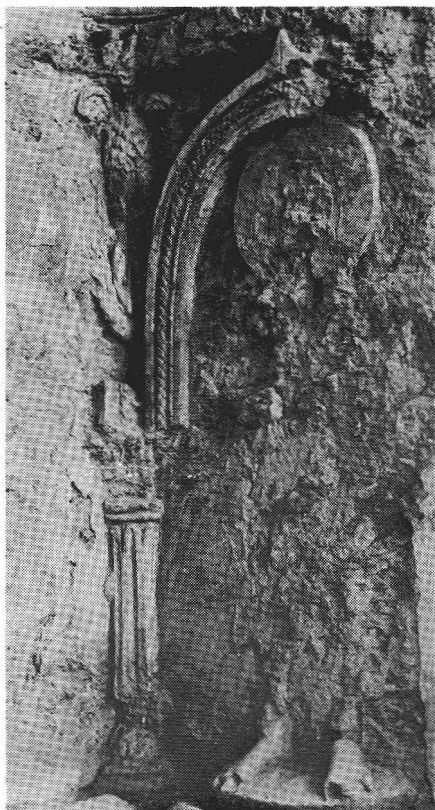


圖6 壁柱と猛禽

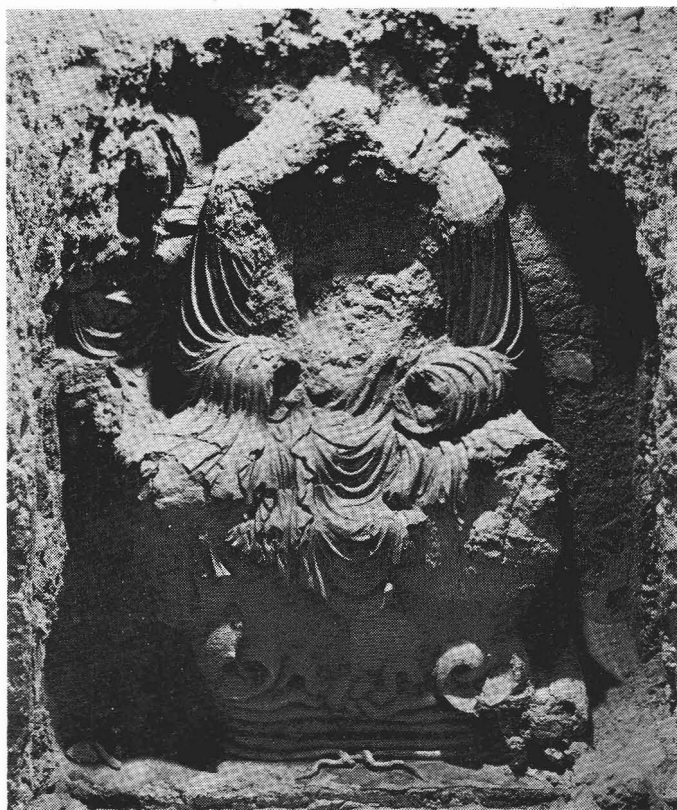


圖7 蛇座



圖8 蓮池の場面 (Fish Porch)



圖9 龍王像 (Fish Porch)



圖10 菩薩像 (Fish Porch)

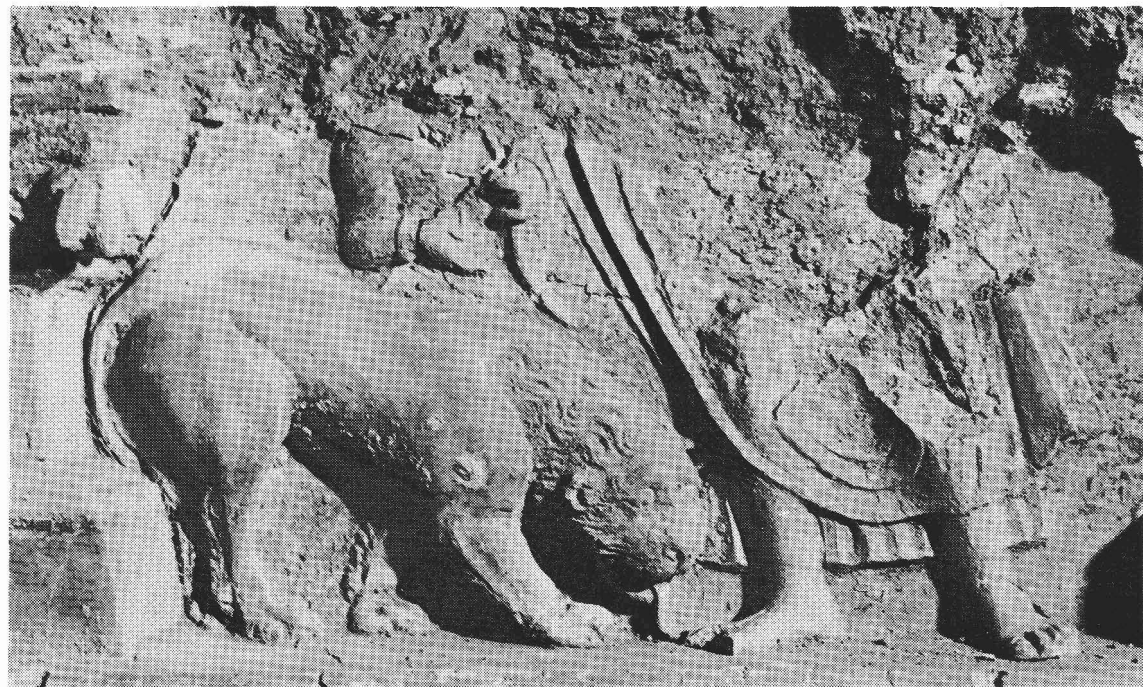


圖11 小塔 (No. 7 bis) 基壇浮彫